

日常の頓悟頓修 越智通世

「六祖壇經

講義」はもちろんのこと、FASの理論と実践の体系として説かれた「教信行覚」においても、久松先生は頓悟頓修を強調しておられる。そして最後まで頓を説かれた。

神秀の偈

「身は是菩提樹心は明鏡台の如し。

時時に勤めて拂拭せよ。

塵埃をして惹かしむること勿れ。」に対する、

惠能の偈

「菩提本樹なし。明鏡は台に非ず。

本来無一物。何れの処にか塵埃を惹かんや」

を読むと、ハツとする。平素いくら勤めようとしても、実現できないでいる漸修的態度とは桁外

れの、根源的な気づきが説かれていると感ずる。だがそれはどう成り立つか。手懸りは容易でない。

禁断の智恵の木の実を喰い、反省的思考を識つた人間は、存在・非存在を含めて相対的な価値観の執われから、どうしても離脱し難い。「どうしてもいけなければどうするか」という基本的公案を負っている。ある海外のFAS方式の接心に参加したとき、老若男女数十人と質疑応答的集団相互参究する役割を与えられた。そして進むことも逃げることもしない重責の思いに耐えかねて、必死に坐を重ねた。当日の暁天坐において「無一物中無尽蔵」を味わった。空間的際限がなくなり、あとからあとから豊かな時が湧いてくるありがたさ。もう何も言うことはない。重責にわずかなりとも応えなければならぬと切羽詰まって、わが身、心の思いを放ち忘れ

て投げ出したところ、そこは時間、空間を超え、生死を超えてしまっている。この目覚めを忘れて去ることはない。気づけばいつでもどこでも直ちに甦える。

正念相続というが、いつでもどこでもということとは物理的時間、空間における連続ではない。人間の意識は神出鬼没する。意志や記憶力で持続できるものではない。時時と頓とは矛盾しない。問題は拂拭である。私達は身心の疲労、痛苦、ぼんやり、いらいら、暴発等の妄念、妄想、貪瞋痴のとりことなる。「本来無一物」「莫妄想」といわれてもそうはいかぬ。盤珪によると、これらの妄念を拂おうとすることは、血を血で洗い落そうとするようなもので、どこまでいっても穢れは落ちない。念というものは鏡に映つては消える影のようなものだから、起るまま消えるままに取り合わず「不生の仏心」のままでおれば、その光の中に融けて

跡を残すことはないというのである。それができれば苦勞はないが、そうできなくてのたうち回らなければならない。

かつて先生の前で「覚など思いも及びません」と言ったら、「それは成り切ることですよ」と端的に示された。昔から坐つて脚が痛ければ、「痛みとともに消え去れ」という。同様にできることは自分の貪瞋痴をごまかさず、しつかり行動も見つめてこれと取り組むことである。「どうしてもいけなければどうするか」進みもならず退きもならず切羽詰まってその苦悩の塊りとなった時、転がくる。よくもあしくも兎も角も、踏み出さずにおれない次の一步を進めることになる。あとはその先のことである。「百尺竿頭一步を進む」真実が展開する。分別料簡できない疑團となつた時、自分と相手、物や体と心、知情意が一つに還つてはたきである。自己の本来の性の活

瞬間がみなある。いつでもどこでもそいつに直通している。現在の在り方から飛び出したところが本当のものである。坐っていて坐っているということもなければ、心に思っているということもない。寸分のへだたりもない。アプローチを要しない。：観念になったら働きが出てこない。枠から飛び出せない。：執着とか煩惱が妨げている。：とりつくしまもないところに絶対否定があり転ずる。多角形の辺を何辺増しても円ができないということがわかったら、一つの円である。まだまだ多角形の辺を描いてゆけばおさまると思っ

ているところに近代の錯覚がある。一を多から求めてゆく方向である。どこからでも、そこから飛び出るといのは一から始まるということだ。後近代は一から始まる。一が根本である。一切はそこから始まる。：転ずる：自分に愛想がついたならば、飛び出ることができるわけです。」と。

わが身に愛想が尽きるうえに、あまりにも悲惨なでき事が続く。人間というものに愛想が尽きる思いでさえある。「どうしてもいけなければどうするか」。瞬間瞬間を現在のあり方から飛び出して、一から始める頓悟頓修を心がけたい。(これは今年の三月に行われた発題発表をまとめたものです)